
マフラーと交換

神威ガン s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マフラーと交換

【Nコード】

N9539D

【作者名】

神威ガンス

【あらすじ】

幼馴染とツンデレ系少女の話です。幼馴染がマフラーを作ってくれたが、恥ずかしさでどちらも素直になれず結局マフラーと交換となった。

「ちよつと待つてよ。歩くの早いって」

「別についてこいなんて言つてないんだが」

「ちよつと待つてつて。どうせ同じとこ行くんだし、いいじゃない」

「別に居るのは構わない。が、なんで俺がお前のペースに合わせなきゃいけないんだよ」

と、言つて後藤くんはスタスタと歩いて行つてしまった。

「ちよつと。待つてよ」

「お前を待つてたら学校に遅刻するだろ？」

後藤のくせに何よ、その言い方。

「なんで遅刻になるのよ。まだ時間はあるじゃない」

「俺は忙しいんだよ。朝からいろいろやらなきゃならないことがあるんだ」

「なによ？」

「なつ、なんで教えなきゃいけないんだよ。だ、だから俺は急いでるんだよ」

なんでこんなに動揺したんだろ？まあどうでもいいか。今はそれよりこの状況をどうするか、ね。

「とりあえずあたしも今日はいろいろあるから……………でもそれにはあんたもいなきゃいけないのよ」

「どうせ、また公園の掃除だろ？お前が趣味でしている。そして、なぜか俺が強制的に手伝わせられる訳だ」

ズバリ全て言い当てられてしまった。なにくそ、後藤のくせに。

「だって今は秋でしょ。だからこの落ち葉を奇麗に掃除して、一カ所に集めて昨日実家のおじいちゃんに貰った芋を焼こうと思つて。食欲の秋って言つし、やっぱ秋と言えば焼き芋でしょ。どうせなら後藤くん誘つて、落ち葉拾い任せよー。どうせ暇でしょアイツ。ま、苗字が前木の私にとって、後藤なんて後ろっぱい名前の奴なんだか

ら、私に従えばいいのよ……なんて思っていないわよ別に」

「なにわざわざご丁寧に人の悪口大声で喋ってんの」

あつ、いけない。つい思ったことを全部口に出しちゃうクセが。

あつ、このままじゃ、可愛い女子高生が一人で寂しく焼きイモする図が完成しちゃう。ダメ、私みたいな可愛い女の子が一人で焼き芋とか。

「べ、別に……後藤くんなんて居なくてもいいんだけどさ、どうせ暇でしょ？だから、仕方なく誘ってあげているんだから、大人しく誘いに乗りなさいよ」

逃がさないようにと首を絞めてやろうと飛びついた私を、ひょいと後藤くんは避けてしまった。

あれ、いつもならこれで私がブイブイ言わせて後藤くんは渋りながらも「わかった」って言うてくれるのに……。

「いや、悪いんだけど今日はちょっと付き合えないんだよ」

「なんでよ」

「ちよつとな。言っただろ放課後に用があるって」

「放課後っては何言っていないじゃない。朝ってしか言っていないわよ」と、言っている間に学校に着いてしまった。後藤くん何があるんだろ？

「悪いけど用あるからゴメンな。じゃーな。」

そう言っただけで後藤くんはちよつと気まずそうに走って行ってしまった。ねえ、それってそんなに大事なことの……。

。放課後、学校が終わっても後藤くんは現れなかった。『オカシイ』。おかしいよ。

いつも一緒にいて、一緒に遊んで、一緒に……。

一人ぼちで枯葉を集めて、火をつけて、アルミホイルに包んだイモをパチパチと音がする火の中に埋めた。

ゆれる橙色の火は沈んでいきそうな夕陽とよく似ていて、なんだかセンチメンタルな気分になった。

膝を抱えて座り込んで、組んだ腕に首をうずめる。マフラーは去年買った奴をどこかにやってしまつて最近首元が寒い。

「なんであたしみたいな可愛い子が一人で焼き芋しなきゃなんないのよ。なんでこんな惨めな気分で焼き芋しなきゃなんないのよ」

「あー、なんかすごい腹立ってきた。すごいイライラしてきたあー。後藤のバカやるーーーー!!!」

「ぐわっ!!!」

あくびの両様で大きく伸ばした腕が何かに当たった。

うしろを振り返ると後藤くんはが太の字になって寝ていた。

「そんなに眠いなら家で寝れば？」

「はあ？　たく……アゴにモロ入ったよ」

後藤くんはアゴをさすりながら、制服に着いた土を払いながら立ち上がった。

「自業自得よ。あたしの誘いを断るからそうなるのよ」

「そうゆうこと言うか？　ったく、これを見てから言えよ」

そっぽを向いていたのに、その視線の中に紙袋を突きだされた。

「なに？これ」

「開けてみないとわかんないだろ？ 苦労したのにアッパーかよ」

ゴチャゴチャうるさい後藤はシカトしておいて私はその紙袋を受け取って中を覗いた。

「なつ、なによこれ」

「お前、去年買ったマフラー無くしたって言ってただろ？だからちよっと手芸部のやつに教えてもらって作ったんだよ。」

かつ、勘違いすんなよ。べつ、別に意味とかないからな。お前今月誕生日だろ？いや、でも……こつ、これ誕生日プレゼントとかそ

んな……うわっ」

紙袋から取り出した下手なマフラーを握って、慌てている後藤くんをおもいつきり殴った。

「えっ、なんで俺殴られ………」

「はい」

まだ、痛がつている後藤くんに焼き芋を差し出す。

「あんただけなんだから。こうやって焼き芋とかしてあげるの」

「バーカ、俺だってこんまワガママお前じゃなかったら付き合ってやんねえよ」

まだ夕陽は沈んでいない。これで私の顔が赤いのは誤魔化せるはず。でも、後藤くんが赤いのが私には分かるから………。

「交換ね。マフラーと焼き芋」

「だな。俺もそのために作っただし」

背後で焚き火の破裂音が響いた。私は座っている後藤くんに手を貸してやる。彼の手はとても暖かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9539d/>

マフラーと交換

2011年1月3日07時28分発行